

『悪魔学』(1597年)訳註

—承前—

荒川 吉孝¹

要旨： 以下は、スコットランド王ジェームズ六世（1603年以降、イングランド王ジェームズ一世）の『悪魔学』（1597年エディンバラ刊）を翻訳し註釈を施したものである。この本は三巻から成り、ここでは第二巻第四章から第二巻最終章（第七章）までを取り上げる。

第四章では、魔女たちが集会に行くための移動手段を検討し、彼らが経験する幻覚に論及する。第五章では、妖術の具体例と妖術による病気の治療法を示す。第六章では、妖術の害をうけやすい人々、魔女たちの持つ力、悪魔が様々な姿で魔女たちに現れる理由について論じる。第七章では、この世での悪魔の二様の働き、すなわち、あからさまな出現と隠微な不法の術とについて考察する。

キーワード： 移動手段、幻覚、妖術、治療、不法な術

第四章 梗概

魔女たちが遠く離れた場所へ移動するのに可能な方法。サタンが生み出した、現実にはあり得ない、ただの幻覚。その根拠。

フィロマテス だが、どうやって魔女たちは、こうした不法な集会に来ることができると言われていたんだい。君はどう思う。

エピステモン 感覚が惑わされているのじゃないかと思えるふしがある。自分で信じているから告白に偽りはないのだが、実際のところ真実とは言えない。彼らの話では、主人を崇めたり、課された奉仕を行なったりするため、色々な手段で集まることができるというんだ。

ひとつは自然な方法で、主人が来ると予め知らされた時刻に、馬に乗ったり、歩いたり、船に乗った

りしてやってくる。この方法は容易に信ずることができる。

もうひとつの方法は、これに較べると、いくらか奇怪だ。それでも、真実でないとは言えない。つまり、精霊の力で地面か海の上を飛び、精霊に導かれてすみやかに会場へおもむくのさ。それもやはり可能だと思う。ハバククもそんなふうには天使によって、ダニエルの洞窟へ連れていかれたからね。^[11] だから、その点でも、他の点と同様、悪魔はたやすく神のまねができると思う。悪魔は精霊だから、自然の大気現象にすぎない強風などより、固体を別の場所へ運ぶ仕事にずっと向いている。それが実際に行われているのは、普段毎日、目にしているところさ。とはいえ、こんな激しいやりかたでは、わずかな範囲しか移動できない。飛行距離は息の続く距離に比例するから。なぜなら、もっと長距離になると、息が切れてしまうんだ。激しく強い力で体が運ばれるからね。例えば、もし低いところから墜ちれば、命の

¹ 舞鶴工業高等専門学校 人文科学部門 教授

危険は、落下地点が固いか柔らかいか左右されるだけだが、高く険しい岩壁から墜ちれば、地面に達する前に、体から息が無理やり出されてしまう。経験によって何度となく確かめられているとおりさ。しかも、こうして空を飛ぶとき、お互い同士には見えるが、他の者には見えないのだ、と彼らは自分で言っている。それも、ぼくの考えでは、ありうることだ。なぜなら、魔術師に関して前に話したように、もし悪魔が空気に好きな形を刻めるなら、魔女たちの周りの空気をただちに凝集させ、濃く暗くすることなど、はるかに易しいことじゃないか。そうすれば、どんな人の眼光でも、その空気を射抜いて魔女たちを見ることはできなくなる。

だが、集会に来るための第三の方法については、魔女自身が惑わされていると思う。なぜなら、こんなことを言う魔女もいるんだ。小さな動物か鳥に変身して、どんな家や教会にも入り込むことができるよね。普通の出入口はみな閉まっても、空気の入る隙間なら、どこからでも平気だと。また、魔女のなかには、忘我の境にある間、靈魂が肉体から抜け出て、そうした場所に連れて行かれる、と言う者もいる。それを証明するため、明らかに証拠として、自分が出会った人達の名前を告げたり、肉体が無感覚に横たわっているのを見たという証人を呼んできたりする。そして、そうでなければ決して知り得なかった人達がどんな会話を交わしたかについて、証拠を提出したりする。とりわけ、或る地方から別の地方へ行くときは、こういう旅の仕方が一番多い、と断言している。

フィロマテス 本当に、この点について、ぜひ君の意見を聴かせてほしい。まるで、炉辺での老婆のお喋りみたいだからな。

エピステモン²⁾ こうした話が妄想にすぎないと思うのは、こういうわけさ。まず、獣か鳥に変身して、狭い通路から入ることのできる連中。そんな姿に見えるように、悪魔が職人芸で空気に細工をほどこした、と信じるのは訳ないが、固体をそんな小さ

な空間に縮めるなんて、物の道理に反している。だって、そんなに小さくなくても、体積は減少しないのだから。そんなに圧縮されて、痛みをまったく感じないとはね。肉体の性質に反しているし、カトリックのミサでお目にかかる実体変化³⁾にそっくりなので、ぼくにはとても信じられない。固体に量があるのはまさに当然だから、すべての哲学者が結論するように、量のない固体がありえないのは、精気(スピリット)に量がないのと同じことだよ。なるほど、ペテロは「どの戸にも錠が掛かっていたのに、牢獄から出てきた」^[24]が、それは、体が小さくなったからではなく、戸が開いたからなんだ。牢屋番はなにも見なかったがね。たとえそんなことが起きても、神の力と悪魔の力では、比較にならない。

忘我と靈魂の浮遊とに関して、確かに言えるのは、魂が体から抜け出すのが、肉体の死の唯一の定義だということ。そして、一度死んだ者を生き返らすのは、地獄の悪魔たちの力によるとも考えられる。そんなこと、あってほしくないが。もっとも、降霊術師がよくやるように、自分の精気を死体に入れることはできる。これは、聞いたことがあるだろう。なぜなら、それこそが、神の領分だから。そのうえ、ひとたび肉体から離れた魂は、もうこの世にさまようことができず、すぐに自分の休息所に行かねばならない。そこで、将来、再び肉体と結合する日を、じっと待っているのさ。この点で、キリストや預言者たちが行なった奇跡は、どう考えても悪魔の業と同日の談ではない。魔女たちの差し出す証拠について言えば、悪魔にとって、彼らを説得してこういった手段を取らせることはまったくお手の物だ。なぜなら、悪魔は精霊だから、魔女たちの思考力を奪い、感覚を鈍らせ、その結果、死んだように横たわる肉体を靈魂に捧げることもできるのではないかな。ちょうど、夢を見ているときのように。あるいは、詩人たちが夢の神モルペウス⁵⁾について書いているように、悪魔も、人や場所、その他の環境を現出させ、思い通りに魔女たちを欺くのでは？

そうなのだ。さらに、もっと上手く欺くため、そ

の瞬間、悪魔は仲間の力を借り、他の人達を同じように騙し、魔女たちに彼らと会ったと信じ込ませるのではないだろうか。それは、皆の報告や証拠が、別々に吟味されても、お互いにつじつまが合うようにするためなのだ。そして、人や獣を傷つけるどんな行為も、魔女が自分でやっと思ったような行為も、悪魔が仲間と協力して実際に行なうためなのだ。かりに魔女が、自分で毒を盛ったり妖術をかけたりしたと思ひ込み、しかも相手がたちまち死んだので有頂天になり、悪魔に従うことになったとする。そのとき悪魔は、神の許しを得て、その同じ人を殺すこともできたのでは。そうやって、いっそう魔女を欺き、他の者たちにも魔女の存在を信じさせることになる。確かにこれが、一番ありそうなことだし、最も理にかなっている。この点や、他のどんな不自然な点でも、ぼくの判断するところ、魔女の告白にはなんらかの理があると思う。こうして、確かにわれわれは、前門の虎と後門の狼の間⁶⁾をくぐり抜けることができる。つまり、かたや、魔女が存在しないという錯誤に陥らぬよう、魔女を全然信用しない態度を避け、かたや、魔女の言うことを信ずるあまり、無数のばかげた考えを抱くことも避けられる。どちらも、神学と人文主義哲学にまったく反しているから。

第五章 梗概

魔女たちが他者に対してとる行動。妖術の使い手はなぜ男性より女性のほうが多いのか。悪魔の力によって、どんなことが魔女に可能となるか。その理由。魔女の害悪にたいする最も確かな救済策。

フィロマテス 確かにこの件に関する君の意見はまったく理にかなっている。さて、魔女自身に固有の行為については話が済んだから、今度は、他人に向けられた行為について話してほしい。⁷⁾

エピステモン 他人に対する魔女の行為については、三つの点が考慮されなければならない。まず、それについて魔女たちがどんなふう相談するのか

という点。次に、悪魔の手先としての魔女の役割。そして最後に、魔女たちに実行させる悪魔の役割。

では、まず、相談について。魔女は悪魔崇拝のために集まる教会で相談を行なうことが一番多い。そのとき、主人の悪魔は、魔女が何をしたいのか訊ねる。それに対し、魔女は銘々、どんな危害を加えたいか悪魔に話す。それは、富を獲得するためだったり、自分が悪意を抱いている者に復讐するためだったりする。悪魔は要求を認め—もちろん喜んでそうするさ、悪を行なうのだから—魔女たちにその手段を教える。それによって、魔女は悪を実行できる。

女たちが係わるちょっとした行為についていうと、悪魔は死体を関節ごとに切断させ、死体から粉末を作らせる。そして、魔女たちに与える他の材料をそれに混合させるんだ。

フィロマテス だが先へ進む前に、一言、口をはさませてくれ。君が女たちと言ったので思い出した。妖術に没頭するのは、どうして男性ひとりに対し、女性が二十人もいるんだろう。⁸⁾

エピステモン 理由は簡単。女性は男性より誘惑に弱いから、悪魔の罠にかかりやすいのさ。初めに蛇がイヴをだましたことから、充分実証済みだよ。以来、悪魔は女性に親しみを感じているんだ。

フィロマテス では、さっきの話にもどってくれ。エピステモン 他者には、そんなとき、蠟か泥でできた人形の作り方を教える。それを焼いて、人形につけた名前の人がしょっちゅう病気にかかり、ひからびたり溶けたりするように。ある者には、病気を治したり病気にしたりする石や粉を与える。またある者には、医者も知らない珍しい毒について教える。(悪魔は人間よりもずっと、自然のあらゆる隠れた特性に通じているからね。)

悪魔の教えるこうした手段は(自然物から構成される毒薬を除き)それ自体、目的に役立つというわけではない。ただ、他の事と同じく、この点でも、悪魔は神の猿だというにすぎない。⁹⁾ ちょうど、神がこの世のものである秘跡によって天上の行為を行ない、その秘跡自体が実際に力を貸しているのでは

ないように。また、キリストが土と唾液を混ぜたもので「盲人の目を開き」^{[3] 11)}、しかもその薬自体には効力がないのと似ている。悪魔も、いわば自分の行為の外観となるように、見せかけの手段を採用するのだが、それ自体は彼の行為をまったく助けていないんだ。無知な人間がどんなにだまされてその逆に考えてもね。このふたつの部分—つまり相談と見かけの手段—の効果は実に不思議なので、その可能性について十分な根拠も示さずに、なにも断言することはできない。

さて、女たちのささいな行為はこれくらいにして、彼らの妖術の主な点について話すことにしよう。ありふれたささいな事なら、変身しなくても自分で充分できるからね。主な点とは、いいかい、こういうことさ。彼らは男女を問わず互いに愛情や憎しみを抱かせることができる。そんなこと、悪魔にとっては朝飯前。悪魔は狡猾な霊だから、人間の墮落した感情に働きかける術をよく心得ているし、人間をそのように扱うことを神も許してくださるだろう。魔女たちはまた、或る人の病気を別の人に移すことができる。それも悪魔には同じくお茶の子さいさいだね。なぜなら、神の許しを得て、悪魔はヨブを病気に罹らせたのだから、¹¹⁾ どうしてはるかに容易く、他の誰でも、病気にできない訳があるろうか。悪魔は経験豊富な開業医だから、われわれの誰を診ても、どの体液が最も優勢がよくわかる。¹²⁾ それから悪霊として、われわれを苦しめるのに適当と思うやりかたで、その体液を活性化させ、あふれさせたり病気の原因にしたりするんだ。とりわけ神が悪魔にそうすることをお許しになる場合はね。また、病気の治療について言うなら、明らかに悪魔は喜んで痛みを取り除いてくれる。こうした手段で、永遠の畏と束縛に捕われるよう、人間を誘惑しようと考えているのかもしれない。

魔女たちは、前に言ったとおり、人形を焼いて男や女に魔法をかけ、いのちを奪うことができる。それもやはり、主人の悪魔にとっては、まったく可能なことだ。なるほど、前に話したように、その蠟製

の道具自体にそんなことをする力はない。が、魔法にかかった奴隷が蠟を火で溶かすのとまさに同様、悪魔はその同じ時に、悪霊として巧みに相手の生気を弱めて散らすことができるのではないかい。その結果、一方では被害者がふらふらして体内の体液を汗とともに外に出し、他方、消化を促す生気が調和して作用しないため、胃を衰弱させ、過剰な体液が絶えず滲み出し、新しい液も補給されないので、消化不良を起こし、ついには消え失せてしまう。ちょうど、人形が火に焼かれて消え失せるように。しかも、あの不埒で狡猾な職人は、ほんのときたま手を出すだけで、片方の働きともう片方の働きのバランスをみごとに取るから、どちらも言わばいちどきに終わることになる。

魔女はあらしや暴風を海や陸の大気中に起こすこともできる。といっても、どこでもと言うのではなく、神がお許しになる特別な場所とあらかじめ決められた範囲のなかでだが。また、大気現象にすぎない他のどんな嵐とも違い、魔女の起こす嵐は、突然、激しく吹き始めるし、短時間しか続かないから、簡単に見分けることができる。こういったことも、魔女の主人なら確かに可能だ。悪魔は霊だから、大気と近親関係にあるうえに、前に断言したのを君も聞いたと思うけれど、大気を形成したり動かしたりする力を持っているから。というのも、聖書では、「大気之王」^[4] の称号が彼に与えられているからね。

魔女はまた、人々を狂気に陥れることができる。それも魔女の主人にはわけもない。狂気は身心の病だから、他のどんな病気とも同じく、悪魔には人を狂わす力がある。魔女は精霊を使って人を追跡させ、悩ませ、家々に出没させ、しばしば住人をこわがらせることができる。今そういったことを魔女がしているというのは周知の事実だけれどね。同様に、魔女は人を悪霊に取りつかせ、本物の悪魔憑きにさせることもできる。この最後のことは、主人の悪魔にとっても同じく可能だ。なぜなら、悪魔はやすやすと手下の悪霊をつかわし、神が許したもうどんな人間でも、好きなように苦しめることができるのだから

ら。

フィロマテス しかし、神は、悪魔の力によってこういった悪の手先が人間を苦しめるのを、お許しになるだろうか。せつかく神を信じているのに。

エピステモン それは確かさ。というのも、次の三種類の人たちに関しては、そのように誘惑されたり苦しめられたりするのを神が認めているからね。まず、おそろしい罪を犯した邪悪な人たち。彼らには、その罪に応じて罰をお与えになる。次に、大きな罪や弱さ、信仰の薄さを気にせず眠っている「信心深い」連中。悪霊の奇怪な姿を見せることで、それだけ早く彼らを目覚めさせようとしているんだ。さらには、この上なく善良な人々も。ちょうどヨブさながら、彼らの忍耐がこの世で試されるためにね。なぜなら、神は好きなときに、どんな途方もない罰でも与えることができるだろう？ 病気やそのほかの逆境といった普通の鞭と同様に。

フィロマテス それでは、誰がこうした悪魔のたくらみを免れることができるんだい。

エピステモン だれも自分は大丈夫だなんておこがましく約束すべきじゃないな。なぜなら、神はすべての人に、その人固有の災いを、幸福と同様、あらかじめ定めているのだから。神は自分の決めた時にそれがふりかかるよう定めているんだ。だったらなおさら、悪魔と悪の手先が仕向けるどんなことに対しても、恐れをいだく必要はない。ぼくたちは他の何百という方法で、悪魔と毎日戦っている。だからこそ、勇敢な将として、戦で怯えもしなければ、大砲の轟きやピストルの音にひるむこともない。自分の身に何がふりかかるか分からなければね。まさにそんな具合に、大胆に、悪魔との戦いに赴かなければならない。日ごろ見かける普通の武器にも、悪魔の最強の武器にも、恐れをいだくことなく。

フィロマテス それでは、妖術でかかった病気を他の魔女の助けで治すのは、合法的でないのかい。

13)

エピステモン まったく合法的じゃないね。理由はあの神学の格言¹⁴⁾によって説明したる。例の

魔術について話したとき、最後に言ったことだよ。

フィロマテス それなら、どうしたらこの病気を合法的に治せるんだい。

エピステモン ただ神に敬虔な祈りを捧げ、生活を改め、銘々自分の天職に従い、悪魔の手先を厳しく追跡するほかに方法はない。悪魔の手先を死刑にするのは、病人の健康を回復させる犠牲となるだろう。¹⁵⁾ これは単に合法的なだけでなく、もっとも確実な方法だ。悪魔の手段なんぞでは、「どうして、サタンがサタンを追い出せよう。」¹⁶⁾とキリストも言われているから。そうした手段で癒やそうとしても、短期間しか効果は続くまい。結局、患者の肉体も魂も、地獄に墜ちることは目に見えて明らかだよ。

第六章 梗概

どんな人々が妖術の害をもっとも受けやすく、また受けにくいのか。どんな力を彼らは治安判事に対して行使できるのか。どんな力を彼らは牢獄で持つことができるのか。なんの目的で悪魔は牢獄にいる彼らの前に現れるのか。なにゆえ悪魔は様々な者たちに様々な姿をしていつでも現れるのか。

フィロマテス でも誰が魔女たちの処罰をあえて引き受けるだろう。誰もその超自然的な襲撃を免れる保証がないとしたら。

エピステモン そこへ登る道が狭く険しいからといって、徳行を断念すべきではない。それに、信仰の薄い者たちくらい、彼らから危害を受けやすい者は他にいない。(信仰こそはそうした襲撃から身を守る最強の盾だからね。)したがって、この世のことを考えず、骨身を惜しまず熱心に追跡する者に対しては、魔女たちも無力なんだ。

フィロマテス それなら、彼らは疫病のようなものだ。疫病は、危険を察知して一番遠くまで逃げる用心深い人たちを襲うからね。

エピステモン 魔女たちもまさにそうなのさ。なぜって、病人が先ず彼らの力を信じて自分の魂を危

険にさらさないかぎり、どんなまやかしの治療も施せないからね。魔女たちは誰に危害を加えることもできない。とりわけ彼らのすることを軽蔑している者にはね。だから、それは盲信からくるので、魔女たちのむなしい傲慢からではまったくない。

フィロマテス では、治安判事に対しては、連中はどんな力があるんだい。

エピステモン それは、大きくもなるし、小さくもなる。治安判事の出かた次第だね。もし怠けて魔女たちを放っておくなら、神は彼らを手足として使い、治安判事の目を覚まさせ、彼に罰をお与えになる。反対に、もし神の正義の法とすべての国の正当な法に従い、熱心に魔女たちを審問し罰するなら、神は、これほどの善行を魔女たちの主人に妨害させておくはずがない。

フィロマテス しかし、いったん逮捕されてから、彼らの術にまだなにか力が残っているのかい。

エピステモン それは拘留の仕方によるな。もしなにか私的な理由で私人に逮捕され拘留されるだけなら、逃げたり危害を加えたりする力は、確かに前と変わらない。一方、もし魔術を行使した咎(とが)で、法を守る治安判事に逮捕され拘留されたのなら、その力は彼らが主人の悪魔と関わり合いになる前の状態にもどってしまう。なぜなら、神が法の代理人たちを使い正義の鞭を加えるとき、悪魔には、神をだまして職務を奪ったり、強力な懲罰の笏を無効にしたりすることはできないんだ。

フィロマテス だが、いったん捕まって投獄されてしまうと、彼らの主人はまったく訪ねてこないのかい。

エピステモン それは、この惨めな奴らがどういう状態にあるかによるね。仮に、まだかたくなに神を否認しているとしよう。悪魔は魔女たちと話す時間を見つけ次第、もし彼らが安心してゐるなら、労を惜まず、なんらかの方法による救出について、むなしい望みですます彼らを満たすだろう。反対に、深く絶望しているなら、なんとかしてその絶望を深め、なにか異常な手段で彼らを自殺に追いやる

だろう。しかし、もし悔い改めて告白するなら、悪魔がその存在と誘惑によって彼らを悩ますことは、神がこれを許さない。

フィロマテス なるほど、悪魔の助言を入れてはだめなようだね。でも、ぜひ教えてほしい。牢獄のなかにいる魔女たちの前に現れるとき、悪魔はどんな姿になるんだい。

エピステモン いろいろな姿になる。ちょうど他のときに彼らの前に現れるのと同じように。前に、魔術師について話したとき言ったけれど、悪魔は普通、そのような魔法使いたちに、それとわかる姿で現れるんだ。また、もし相手がまだ見習いなら、魔法円や呪文の出来に応じて姿を変える。だが、こういった囚人たちには、好きなように現れる。また、彼らの気分にもっとも適した姿だね。魔女たちの集会の場でさえ、悪魔はいろんな連中にいろんな姿で現れるから。その点については、魔女たちの告白がそれぞれ違うことで分かる。というのも、悪魔は彼らを大気の空虚な刻印によって惑わし、無知な連中にとって、より一層、自分が恐ろしく見えるようにするんだ。それによって、彼らがなおさら悪魔を恐れ敬うように、と考えてね。また、利口な連中にとっては、さほど奇怪でも粗野でもなく見えるようにする。さもないと、悪魔の醜さに震えおののき、しりごみしかねないから。

フィロマテス でも悪魔にどうやって触れることができるんだい。魔女たちは悪魔に触れたと告白しているけれど。もし悪魔の体がただの空気だとしたら。

エピステモン ぼくの場合、彼らの告白でそういう話はめったに聞かないね。しかし、悪魔は死体を借りて使ったり、さもなくば、視覚と同様、触覚の点でも魔女たちを惑わしたりするんだ。それは不可能なことではない。われわれの感覚はみな、自分の弱さや普通の病気によって、よく惑わされることがあるからね。

フィロマテス だが、もうひとつ、質問したいことがある。牢獄の魔女たちに悪魔が現れることにつ

いてなんだが。それは、こういうことだ。つまり、たまたまそのとき牢獄にいる誰か他の者にも、魔女たちと同様、悪魔が見えるのかい。

エピステモン 見えるときもあるし、見えないときもある。まさに神様のおぼしめしだね。

第七章 梗概

この世を動きまわるのが見える悪魔たちの二つの姿。なぜ一方はカトリック教の時代に多く見られ、他方はそれ以降によく見られるのか。悪魔の力を否認する者は神の力を認めず、サドカイ人の罪¹⁶⁾を犯している。

フィロマテス それでは悪魔は公然たる弟子以外にも、誰にでも現れる力を持っているのかい。キリストの出現以来、すべての神託や、それに類した幻想が取り除かれ、廃止されてからもそうなのかい。

エピステモン 確かにキリストの到来により、福音の輝きが異教のひどい過ちの雲をすっかり取り去ってくれたよ。だが、ひとを欺くこうした悪霊たちが、その後もときどき現れるのは、日々の経験が教えてくれることだ。実際、この世にうごめくサタンの相異なる姿のなかに、こういう違いが認められる。つまり、ふたつの異なった姿のうち、一方は、福音の普及と「黙示録」第6章にある白馬の征服によって、だいぶ防ぐことができ、目にするのが稀(まれ)になってきた。すなわち、サタンがキリスト教徒たちの前に現れ、あからさまに彼らを苦しめ、むりやり取りつく、といったことはね。もうひとつの姿は、福音以来、もっと普通に用いられるようになった。つまり、悪魔の不法の術によってね。これこそ、我々が論じてきた一切の問題だけれど。この点は、この島での我々の経験によって、真実だということがわかる。なぜなら、これらの国々¹⁷⁾では、目の見えなかったカトリック教時代、口では言えないほど、もっと多くの亡霊や精霊が見えたのだが、今では反対に、そういったものを耳にすることは、一生に一度

もないくらいさ。それでも、こうした不法な術は、当時はずっと珍しかった。今ほど噂にのぼらず、はびこってもいなかった。

フィロマテス その原因は何かな。

エピステモン 我々の罪の様々な性質が神の正義に対して働きかける。様々な種類の罰がそれに対して下される、というわけさ。だから、カトリック教時代に父祖たちはひどい錯誤に陥り、無知ゆえに、あの迷妄の霧が悪魔を覆い隠し、彼らのあいだを悪魔は気安く歩くことができたんだ。いわば、子供のように人を怯えさせる恐怖によって、彼らの子供じみた間違いをからかい、責めることができたんだよ。反対に、今は正統の宗教を信じながら、生活のなかで誓いに背いているので、サムエルの言うように、¹⁸⁾ 反逆の罪によって、神は正しくわれわれの生活を責め給うのさ。こんなに片意地に誓いを破っているのだからね。

フィロマテス ちょうどいま、精霊の出現に話を進めてくれたので、ぜひともその点に関してきみの意見を聞きたいな。なぜなら、さっき言ったように、そのような精霊が今でも現れることを多くのひとは否定しているからね。

エピステモン 明らかに、悪魔の力を否認する者たちは、神の力も同じく否認するだろう。もし、嘆かわしくも、そんなことができるならね。だって、悪魔は神と正反対の存在だから、正反対なものによる以上に、よく神を知る道は他にありえない。ちょうど、被造物の力から推し量ってでも、偉大な創造主の御力を崇めるように。一方の虚偽によって、他方の真実を思うように。また、一方の不正によって他方の正義を思い、一方の残酷さによって、他方の慈悲深さを思うように。このようにして、ほかのすべての神の本質と悪魔の性質に思いを致すことができる。しかし実際、心配だな。この世界にはあらゆる種類の霊を否定するサドカイ人があまりに多すぎるんじゃないかとね。彼らの誤りを悟らせるために、たとえ他に何もなくとも、神がときおり霊たちの現れるのをお許しになる十分な根拠がある。

I 原註

- [1] 聖書外典「ベルと龍」
- [2] 「使徒言行録」第12章
- [3] 「ヨハネによる福音書」第9章
- [4] 「エフェソの信徒への手紙」第2章
- [5] 「マルコによる福音書」第3章

II 訳註

- 1) 聖書外典「ベルと龍」第1章33~39節。ハバククは原文では Habakkuk と綴られている。Habbacuc, Habacuc と綴る。ユダ王国の預言者とされるが、血統も、出生地も、時代も不明。第二正典 (deuterocanonical books)断片「ベルと龍」に登場し、天使に導かれてライオンの住む洞窟にいるダニエルのもとへ食事を運んだとされる。「ダニエル書」第6章第8節以降参照。ベルは Bel または Bell と綴り、古代バビロニア人の崇拜した神で、バール (Baal) ともいう。
- 2) 原文では、Harrison 版も古版本 (写真印刷版) も、フィロマテスの話のままだが、文脈から、ここで話し手がエピステモンに変わると考えられる。
- 3) **実体変化** “transubstantiation” はカトリック教会の正統教義。ミサ (聖餐式) のパンとぶどう酒において、その偶有性 (accidentia) は存続するが、実体 (substantia) はキリストの肉と血との実体に変化するという説。化体 (かたい) とも訳される。

実体変化は、最後の晩餐のときにイエスが弟子たちに言った言葉に基づいている。

(「コリントの使徒への手紙一」第11章24~25節参照)

カトリック教会では、中世初期に聖餐は象徴か実体かをめぐって論争があり、第4回ラテラノ公会議 (1215) 以降、実体変化が教義となった。さらに、トリエント公会議 (1545-63) において、実体変化は最終的に教義として確認された。

プロテスタントの聖餐式では、キリストがパンと

ぶどう酒として現存することを呪術とみなして否定し、この秘跡は、弟子たちの信仰を通じて共にとどまりたいというキリストの願いをあらわす象徴であると解釈した。イングランドではミサ聖祭はエリザベス一世の政府に禁じられた。

スコットランドでは、1560年の国会制定法により、プロテスタントの長老派教会 (Presbyterian Church) が公式のスコットランド教会 (Church of Scotland) となったが、カトリック教徒も依然として多数存在した。国教会が長老派として確立したのは、本書の著者ジェイムズ王の死後、1690年になってからである。

4) 新約聖書「使徒言行録」第12章6~11節。ヘロデ王に捕らえられ、牢に入れられていたペテロに天使が現れる。牢内は光に輝き、ペテロは救い出される。町に入る鉄の門が自然に開いたと記述されている。

5) **夢の神モルペウス** 原文には Morpheus とだけある。古代ローマ詩人オウィディウスによれば、眠りの神ヒュプノス (Hypnos) の息子で、様々な人間の姿をして夢に現れる。オウィディウス『変身物語』 (Metamorphoses) 第11巻参照。ギリシア語 morphe (形) に由来するオウィディウスの造語。

6) **前門の虎と後門の狼の間** 原文は betuixt Charybdis and Scylla となっている。イタリア本土とシチリア島の間 Messina 海峡にあり、スキュラは危険な岩礁で、カリブディスは大渦巻で、ギリシア神話ではともに女の怪物と考えられた。between Scylla and Charybdis は「進退窮まって」、「前門の虎、後門の狼」といった意味の成句。

7) 本書第二巻第三章で、魔女たちの行動を、「彼ら自身に関する行動と他者に対してとる行動」に分類している。「『悪魔学』(1597年)訳註」(『舞鶴工業高等専門学校紀要』第40号、2005年)、120頁参照。

8) **男性ひとりに対し、女性が二十人も** 英語の twenty は漠然と多数を意味することがあるが、この意味を「女性が男性の二十倍」と解すると、その数字には誇張がある。ブリッグズによれば、最近の

推定では、当時ヨーロッパで妖術の科^{とが}で処刑された者の数は4~5万人であり、そのうち、地域によって開きがあり、スコットランドの場合は示されていないが、男性は約25パーセントを占めていた。すなわち、ヨーロッパ全体では、ほぼ、男性ひとりに対し女性三人の割合になる。

Robin Briggs, *Witches and Neighbors: The Social and Cultural Context of European Witchcraft* (New York, London, Toronto, Auckland: VIKING, Penguin Books, 1996), p. 260.

9) 悪魔は神の猿 … 当時の諺に “The Devil is God’s ape.” (Tilley, D247) があり、本書第一巻第六章、第二巻第三章にも言及されている。

10) 盲人の目を開き … イエスが生まれつき目の見えない人を癒し、その目が見えるようになった話は、「ヨハネによる福音書」第9章に出てくる。

11) … 神の許しを得て、悪魔はヨブを病気に罹らせた … 原文では「… 彼はヨブを病気に罹らせた」とあり、「彼」はその前の「悪魔」(Deuil) を指す。しかし、「ヨブ記」では「サタン」と呼ばれ、いわゆる悪魔とは異なっている。『聖書思想事典』では「ヨブ記」の「サタン」を次のように説明している。

「旧約聖書は、サタンについてはごくまれにしか話っていないし、語る場合にも超越的なものは唯一の神のみであるとの立場を堅持しており、人間の陥りやすい二元論へイスラエルを向かわせるおそれのあるものはすべて注意深く避けている。サタンはまず、いわゆる敵対者というよりも、ヤーウエの宮廷の天使のひとりとして描かれており、地上の人間に神の義と権利を尊重させる役目をもつ検事のような務めを天上の法廷で果たしている。ところが、外見上はこのように神に奉仕していても、その裏には邪悪な意志が隠されていることを、すでにヨブ 1~3 は伝えている。サタンはそこでは、神自身には逆らっていないとしても、少なくとも人間とその義に対しては敵意をいだいている。」(『聖書思想事典』[日本語版]、三省堂、1973年。)

12) 体液(ヒューマー)については、前掲(訳註7)

の『悪魔学』(1597年)訳註、119頁、及びその訳註10)を参照。

13) この問いと次のエピステモンの答えには、プロテスタントの立場が反映されている。上山安敏によれば、「…プロテスタントの脱魔術の営みは、憑依、悪魔祓いの廃止にまで進む。これは呪術に対して呪術で対抗するという呪術体系のコスモロジーを徹底して破壊しようとしたのである。」『魔女とキリスト教—ヨーロッパ学再考—』(1993年; 講談社現代学術文庫、1998年)、296頁。

14) 本書第一巻第七章末尾を締めくくる次の言葉「タトエ善ノタメデアッテモ、悪ガナサレルベキデハナイ。」(原文はラテン語)を指す。拙稿『悪魔学』(1597年)訳註—その2—(『ノートルダム清心女子短期大学論叢』第24号、2000年3月)、163頁参照。

15) こうした論法は、当時猛威をふるった魔女狩りにひとつの根拠を与えるものである。

人間の病気や災難は、家畜や穀物の被害などと並び、魔女の仕業とされた悪意による行為、いわゆる「悪行」(マレフィキウム、maleficium)のなかに含まれていた。魔女裁判の手引書として有名な『魔女への鉄槌』(1486)の原題、*Maleus Maleficarum*は「悪行者への鉄槌」という意味であるが、そのなかに次のような記述がある。

「一般にすべての神学者たちが記すところによれば、魔女たちは、悪魔の助けにより、悪魔が単独で害したり欺いたりできるすべての面で、人間とその活動に対し、災いをもたらすことができる。すなわち、人間の活動、名声、身体、理性、および生命に対して。それはまた、魔女なしで悪魔のみがもたらす災害は、どれも魔女が原因となり得る、ということである。しかも、よりたやすく。なぜなら、上述したように、それだけいっそう神を怒らすことになるからである。」

(英訳版115頁からの拙訳)

この点については、すでにレジナルド・スコットが『妖術の発見』(1584年)の冒頭で次のように批

が『妖術の発見』(1584年)の冒頭で次のように批判している。

「妖術に関する作り話は人間の心をしっかりつかみ、そこに深く根を下ろしているの、(今日では)神の支配や懲らしめに辛抱よく耐えられる者はほとんど、あるいはまったく、いなくなった。というのも、もしなにかの逆境や、悲しみ、病気、子供の死、穀物や家畜の被害、あるいは自由の喪失といったものが身に降りかかると、すぐに彼らは魔女を非難するからだ。あたかもイスラエルにはみずからの意志ですべてのものに命令をくだす神がないかのように。神はみずから良いと思う方法で、正しき者も不正な者も、悲しみ、疫病、苦悩によって罰をお与えになる。ところが、彼らは、この世に存在し魔女と呼ばれる老婆たちがすべての災いの原因であり、自分はなんの罪もなく、そうした罰を受けるいわれはない、とでも言わんばかりなのである。」(拙訳)

そうしたスコットの論点に反駁することが、冒頭「読者への序文」に見られるように、ジェームズの主な目的のひとつだった。拙稿『悪魔学』(1597年)訳註—その1—(『ノートルダム清心女子短期大学論叢』第23号、1999年)、46頁参照。

16) サドカイ人の罪 「読者への序文」に次の言葉がある。「そのうちのひとり、スコットと呼ばれるイギリス人は、恥知らずにも、魔女の妖術の存在を書物を通じて公に否定し、かくて、霊を否認する点で、いにしへのサドカイ人と同じ誤りを犯しているのです。」この点については、「使徒言行録」23章8節を参照。

17) これらの国々 すぐ前に「この島」とあるので、スコットランドとイングランドを指す。本書出版当時、ジェームズはスコットランド王ジェームズ六世だったが、1603年のエリザベス一世崩御とともに、イングランド王を兼ね、ジェームズ一世となり、両国は統合された。

18) サムエルの言うように、…「サムエル記」上、第7章、12章、15章等を参照。サムエルは生没年ともに不明だが、紀元前11世紀末頃の預言者・士師。

参考文献

I. 一次資料

James I of England. *Daemonologie* (1597) / *News from Scotland* (1591). Ed. G.B. Harrison. New York: Barnes & Noble, 1966.

———. *Daemonologie*. The English Experience Series, No. 94. New York: Da Capo Press, 1969.

II. 二次資料

Briggs, K. M. *Pale Hecate's Team: An Examination on Witchcraft and Magic among Shakespeare's Contemporaries and His Immediate Successors*. London: Routledge and Kegan Paul, 1962.

Briggs, Robin. *Witches & Neighbors: The Social and Cultural Context of European Witchcraft*. New York, London, Toronto, Auckland: VIKING, Penguin Books, 1996.

Scot, Reginald. *The Discoverie of Witchcraft*. Ed. Montague Summers. 1930; rpt., New York: Dover Publications, 1972.

Sprenger, Jacobus and Heinrich Kramer. *Malleus Maleficarum: The Hammer of Witchcraft*. Trans. Montague Summers, ed. Pennethorne Hughes. London: The Folio Society, 1968.

『キリスト教大事典』改訂新版(教文館、1968年)。

『聖書』新共同訳(日本聖書協会、1988年)。

『聖書思想事典』(1970年; 日本語版、三省堂、1973年)。

上山安敏『魔女とキリスト教—ヨーロッパ学再考—』(1993年; 講談社現代学術文庫、1998年)。

バッシュビッツ、クルト著、川端豊彦・坂井洲二訳『魔女と魔女裁判—集団妄想の歴史—』(法政大学出版局、1970年)

(2007.11.9 受付)

Daemonologie (1597): A Japanese Translation with Notes

—Continued from my previous article—

Yoshitaka ARAKAWA

ABSTRACT: This is a Japanese translation of the *Daemonologie* of King James, the Sixth of Scotland (from 1567) and the First of England (from 1603). The treatise, which is in the form of a dialogue between Philomathes and Epistemon, consists of three Books. The present issue contains the fourth to the seventh chapter of the Second Book. The First Book appeared in *Notre Dame Seishin Junior College Faculty Research Bulletin*, Nos. 22 and 23. The first three chapters of the Second Book appeared in *Bulletin of Maizuru National College of Technology*, No. 40.

The Fourth Chapter examines the ways the witches transport themselves to conventions, and how they delude themselves about the manner of transportation. The Fifth Chapter offers some instances of witchcraft, and a cure for the diseases caused by the witches. The Sixth Chapter discusses what sort of folks are most subject to harm by witchcraft, what power witches have, and why the devil appears to witches in different shapes. The Seventh Chapter considers the contrasting aspects of the devil moving about in this world, i.e., his overt behaviour and his latent power.

Keywords: *transportation, delusion, witchcraft, cure, unlawful arts*